

○平成27年度奨励研究

「茨城県における小児の高次脳機能障害患者に対する行動評価法および訓練プログラムの開発」

作業療法学科 助教 岩崎 也生子

1. 研究目的

事故や疾病による小児期に高次脳機能障害を有する患者は少なくない。しかし、成人における高次脳機能障害に比べて小児期の高次脳機能障害に関する認知度は低く、障害が見過ごされ介入が十分に行われていない現状がある。小児における高次脳機能障害の問題の特徴としては、①発達に伴い症状が変化する、②脳の可塑性があるために症状の改善がある、③検査方法が限られている、④就学するまで障害が目立たない、⑤二次障害の予防が必要、などから小児における高次脳機能障害の判定は成人以上に難しく、介入にあたっては、小児期の発達の視点を考慮した評価・治療の選択が必要である。

そこで本研究では、日頃より小児期の高次脳機能障害に接する方を対象にアンケート調査・インタビューを通して、小児期の高次脳機能障害の特徴および抱える課題を明らかにし、評価・訓練プログラム作成にむけた調査をすることを目的とした。

2. 研究方法

＜小児期の高次脳機能障害患者の抱える課題に関する調査（アンケート調査）＞

1) 小児期の高次脳機能障害患者家族会（子ザルの会）への説明

本研究の意義や目的を説明したうえで、現在のご家族から見たお子さんの、日常生活場面や就学場面でみられる日常生活の困難さ、医療機関とのつながりの有無、リハビリテーションの有無、学校の先生との連携方法、家族へのインタビューの可否についてのアンケート調査を実施した。

2) インタビュー

患者家族会のメンバー7名を対象に、現病歴、これまでの症状の経過、自宅や学校で困難に感じていること、必要と感じている支援についてインタビューを実施した。

＜本学付属病院（作業療法科）に対する調査（アンケート調査）＞

小児期の高次脳機能障害患者に関わることの多い作業療法士に対して、本研究の意義や目的を説明したうえで、リハビリテーション場面でみられる若しくは相談されることの多い、日常生活場面や就学場面でみられる日常生活の困難さ、評価方法、学校の先生との連携方法についてアンケート調査を実施した。

＜特別支援学校教員に対する調査（アンケート調査）＞

日頃、小児期の高次脳機能障害患者に関わることの多い教員に対して、本研究の意義や目的を説明したうえで、就学場面でみられる困難さや課題、就学場面での工夫、他の障がい（知的障害等）との特徴の違い、評価方法、医療との連携方法についてアンケート調査を実施した。

3. 研究結果

1) アンケート調査

日常生活の11場面において140項目が抽出された。困難さがみられる場面および内容の内訳は、食事9項目：一口量の調整ができない、好き嫌いのこだわりが多い、マナーを守って食事ができないなど、整容11項目：髪のとかし残しや髭の剃り残しがある、促されるまで行わないなど、更衣11項目：節に合わせた服を選ぶことが難しいなど、トイレ7項目：方法にこだわりがあるなど、入浴2項目、移乗1項目、移動9項目、コミュニケーション33項目：話の内容を理解できない、場にそぐわない発言が多い、感情の表出が少ない、感情が抑えられないなど、社会交流16項目（友達を作ることができないなど）、問題解決6項目（考えなくてはならない場面で投げやりになるなど）、記憶18項目（宿題があることを忘れる、間違っただけで記憶されたことが修正できないなど）であった。その他自由記載では、感情コントロールの困難さに関する項目が14項目（一度興奮すると自分で落ち着くことができない、些細なことでもいらいらするなど）、就学場面における困難さに関する項目が10項目（授業中起きていられない、自己学習が難しく教員の個別支援が必要など）が列挙された。

2) インタビュー

- ①保護者が感じている症状や制度などの主な課題について以下の項目が挙げられた。
- ・感情コントロールの困難さが本来の性格なのか障害によるものなのか区別が難しい。
 - ・症状の変化が、成長によるものなのか（反抗期など）、二次障害によるものなのか区別が難しい。
 - ・小児期の高次脳機能障害を評価・診断してくれる医療機関が少ない。
 - ・継続的・定期的に評価・治療をしてくれる医療機関が少ない。
 - ・いつどのタイミングで特別支援学校へ移行したほうが良いかなど具体的な相談をできる場所が少ない。
 - ・麻痺などの身体症状がないと、障害があることを理解してもらえない。
- ②医療者が感じている課題について以下の項目が挙げられた。
- ・小児で用いることができる高次脳機能障害検査が少ない。
 - ・リハビリの一場面では、社会性の欠如や感情障害などの症状が現れにくい。
 - ・医療と学校との連携が乏しい。
 - ・医療・学校・保護者との間で、「できること」「できないこと」の共通認識が得られにくい。
- ③特別支援学校教員が感じている課題について以下の項目が挙げられた。
- ・学校での学習内容が積み上がらない。
 - ・高次脳機能障害の症状なのか性格なのか判断することが難しい。

4. 考察（結論）

アンケート結果より、日常生活上で困難を感じている内容には、マナーを守れない、場面に適した行動を行うことが出来ないなどの社会性を伴う項目が多く含まれていたことが特徴的であった。また、小児の高次脳機能障害の定義は未だ定められていない状況であり、保護者・医療者ともに、社会性や感情の障害を適切に評価できる検査が乏しいことに課題を感じていることが明らかとなった。小児期の高次脳機能障害の特徴として、発達に伴い症状が変化することが挙げられている（栗原，2009）が、保護者・教育者が、成長による性格の変化なのか、高次脳機能障害によるものなのか判断が難しいと感じていた。

以上の結果より、今後さらにインタビューなどを通して、小児期の高次脳機能障害について特徴的な症状を明らかにし、現在評価が困難とされている、社会性や感情障害などが評価できるような行動評価の作成を行う必要があると考えられる。また、成長に伴い症状が変化することから、定期的な評価ができるような場の設定や成長とともに変化する症状に合わせて、保護者・医療者・教育者が「できること」「できないこと」の共通認識を持てるような評価を交えた、訓練プログラムの整備が必要であることが示唆された。

5. 成果の発表（学会・論文等、予定を含む）

- 1) 茨城県リハビリ講習会（日本損害保険協会助成事業）（2015年12月，茨城）にて研究成果の一部を発表した
- 2) 第50回日本作業療法学会（2016年9月，札幌）にて発表予定
- 3) 第40回日本高次脳機能障害学会（2016年11月，松本）にて発表予定

6. 参考文献

- 1) Kadriye Ones, 2009, Effect of age gender and cognitive functional and motor status on functional outcomes of stroke rehabilitation, Neuro-Rehabilitation, 25, 241-248.
- 2) 久保義郎, 脳外傷の認知-行動評価尺度 (TBI-31) の作成, 総合リハ, 35 (9), 921-932, 2007
- 3) 栗原まな. 小児の高次脳機能障害. 診断と治療社, 2008.
- 4) 栗原まな, 小児後天性脳損傷のリハビリテーション, 小児科診療8, 1485-1494, 2009